

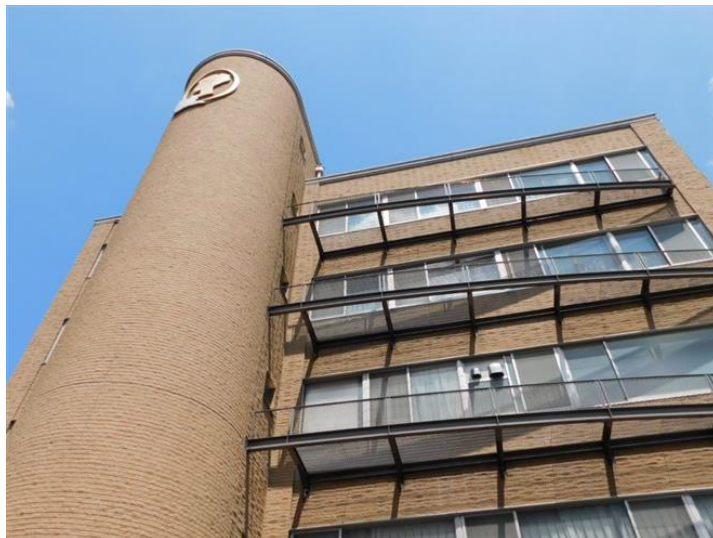
# 歴史ある産婦人科病院を再建した3つの目標—足立病院理事長・畑山博氏に聞く◆Vol.1

2019年7月30日(火)配信 m3.com 地域版

行政機関やオフィスが集中する京都市の中心部で明治から産婦人科の病院を続けている足立病院。少子化で産婦人科の病院経営が難しくなっているなか、先進的な発想と実行力でその危機を乗り越えた足立病院理事長の畑山博氏に、新たに構築した医療コミュニティのコンセプトと実現するまでのプロセスを聞いた。(2019年6月7日インタビュー、計2回連載の1回目)

——足立病院は開院して100年以上の歴史がありますが、その成り立ちについて教えてください。

足立病院の開院は1902年、明治35年です。明治政府は、出産時の母子の死亡率をなんとか欧米並みの水準にしたかったようです。そのため、お産を家庭分娩から病院分娩に切り替えることでした。そこで日本からドイツに3人の医師が派遣され、その中の1人が足立健三郎です。健三郎はドイツで最先端の産婦人科医療を見学した後に帰国して、現在の地に足立病院を開院しました。安全で安心できるお産を実現することが目的で、初代の意志は、100年以上たった現在でも足立病院の歴代院長に受け継がれています。



1902年に開院し、100年以上も京都の産婦人科診療を牽引して来た足立病院

——6代目の院長を引き受けた理由を聞かせてください。

院長に就任したのが1996年ですから35歳のときでした。それまでは、京都大学医学部の大学院で研究をしていて、足立病院で週1回直のアルバイトをしていました。1995年に大学院を修了して大学病院の産婦人科に勤務し始めたときに、75歳になる5代目の院長から、「僕はもう十分に院長の仕事をしたから、次の院長は畑山先生がやってくれない？」って、すごく軽い感じでいわれて。足立病院は、院長が次の院長を指名してから辞めるのが代々のしきたりです。

院長を引き受けるかどうか悩んでいると、「足立病院は、どこよりも歴史があって規模も大きくて、地域に根差した病院ですよ。この病院は、やりがいがあって面白いと思うけど」と追い打ちをかけるようにいわれて、その言葉で決心しました。



自らを走りながら考えるタイプと語る畑山博理事長

——院長就任時に立てた目標について教えてください。

院長になった頃は、足立病院も開院して 100 年近くになっていたもので、役割を終えたという状態でした。月間の分娩数が 6 例から 7 例で年間の分娩数が 100 いかなかったですね。4 月に院長になって、その月の外来数が 273 人、現在の 1 日の外来数の半分もない。

これでは歴史のある足立病院が自分の代で終わってしまうと思ったので、再建するために目標を立てました。まず 1 つ目が「分娩数を年間 800 例にして、京都で 1 番の数にする」、2 つ目が「産婦人科には小児科が必要なので小児科を開設する」、3 つ目は大学で不妊治療の研究をしていたので「不妊治療センターを開設する」。

不妊症から、妊娠・出産・小児科まで同じ病院で診てもらえることができる。これは、患者さんにとって、とても安心できることだと思うんです。さらにそれぞれの科の担当医師が連携し助け合うことで、より安全な医療が行えるようになる。これも大切なことです。病院経営の立て直しの面でも、複数の診療科があることが効果的だと考えました。



産婦人科と同じ建物内に小児科があるので安心できる

——3 つの目標を実現するためにされた工夫や、実現する過程で苦労されたことがあれば聞かせてください。

1 つ目の分娩数を増やすことについては、その当時外来で多かった更年期の患者さんを増やすことに着手しました。いろいろな所に出かけて更年期に関する講演をして、そうすると話を聞いた人が来院するようになって、その人が娘さんと親子で来院するようになって、徐々にですが若い妊婦さんが増えていきました。それと早くから家族でお産をするということを推進していたので、お産に立ち会ったご主人が感動して、その感動が男性に口コミで広がっていったのも大きかったですね。2002 年に年間の分娩数が 800 件を超えて、この 10 年間は年間 1600 件前後で推移しています。また、この数年は麻酔科医にもチームに加わってもらい、無痛分娩にも力を入れています。

2 つ目の小児科ですが、これは苦労しました。新しく小児科ができることは、近隣の小児科の医院にとっては脅威ですから。ただ、患者さんのことを考えれば、産婦人科と小児科は同じ病院にあった方がいい。その方が安心できるし、安全です。近隣の小児科医院の先生に丁寧に話をして説明をしましたが、中には、理解はするけれど納得はしないという人もいました。いろいろな意見があったんですが、信念を曲げずにやり通して、結果で正しさを証明していこうと思い 2002 年に開設しました。

3 つ目の不妊治療センターは、出産数が年々減っていくのが分かっていたので、今後は出産の意志はあるけれど妊娠できない、そういう人々を積極的にサポートすることが重要になると考えました。2003 年に不妊治療センターを設立して、2010 年に生殖内分泌医療センターへと発展して、現在では、体外受精と胚移植が年間約 5000 件になり、治療で妊娠する患者さんも年間 1500 人を超えています。



「不妊症治療を行っている人に対して利益を追求しない」というのが理念

——「女性の一生をサポートする足立病院」というコンセプトを掲げていますが、それはどのように実現されていますか。

2011年に検診センターをつくって、子宮がんや乳がんの検診事業を開始しました。また、10年前に乳がんクリニックを併設し、現在年間250件以上の手術をしています。2014年には在宅医療も始め、近隣の医療機関や介護施設などと連携しながら自宅で自分らしい生活を送れるようにサポートしています。現在、500人ほどの患者さんがいます。さらに足立病院の隣に医療モール・京都メディカルガーデンをつくって、眼科、皮膚科、内科、耳鼻咽喉科、泌尿器科の開業医院にテナントとして入ってもらいました。産婦人科を中心にして同じ所に集まった医療コミュニティで患者さんを診療する、足立病院で産まれて、足立病院が最期の看取りまでです。一生涯にわたって、女性とその家族の健康をサポートする病院でありたいと思っています。

### ◆畑山博（はたやま・ひろし）氏

1995年京都大学医学部大学院修了（医学博士）。京都大学医学部附属病院産婦人科などを経て、1996年に医療法人財団今井会足立病院の院長に就任。2018年に院長を退任し、新たに足立病院理事長、社会福祉法人あだち福社会御所の杜ほいくえん理事長に就任。

【取材・文・撮影＝竹花繁徳】